

秦律における労役刑の刑期再論（下）

若 江 賢 三

はじめに

一 張金光説批判

二 秦律における各種労役刑の性格

三 隸臣妾の刑期に関する堀氏の疑義への回答（以下本号）

四 滋賀説批判

五 秦律における刑罪・完刑・耐罪

結 び

三 隸臣妾の刑期に関する堀氏の疑義への回答

隸臣妾を初めとする労役刑が有期刑であったことはこれまでの検討からもほぼ明らかと思われるが、筆者が一九八〇年に発表した有期刑説⁽⁶⁰⁾に対して五点に亘る疑問が堀敏一氏より出されている⁽⁶¹⁾。そこで、かつての筆者の論をここに再度整理して、しかる後にその疑問に答えたい。

先ず、秦律十八種一五六—七簡（軍爵律）には、爵によつて隸臣妾を贖うことの可能なことを記して

欲婦爵二級、以免親父母為隸臣妾者一人、及隸臣斬首為公士、謁婦公士、而免故妻隸妾一人者、許之、免以為庶人。（九三頁）

とある。これによつて、自身の父母であれば、爵二級分で隸臣妾一人を贖い得たことが知られる。また戦鬪に参加した隸臣が斬首（二級以上）の功によつて、自らが公士という一級爵を獲得し、この獲得した公士の爵を返上することによつて、隸妾となつてゐる故との妻を免じ得るというのである。右文により、秦律では、爵二級を隸臣妾の刑期と等価とする原則のあつたことが推定できる。

次に、身内等の身代わりによつて隸臣妾を贖し得ることを示す条文もある。同右一五二—三簡（司空律）には、身内の身代わり労役によつて隸妾を贖い得ることを示して

百姓有母及同姓為隸妾、非適罪毀、而欲為冗辺五歲、毋賞興日、以免一人為庶人、許之。●或贖遷、欲入錢者、日八錢。（九一頁）

とある。これによつて、隸妾は「冗辺五歲」という五年の労役によつて贖い得たことが知られる。しかもこの冗辺五歳を金銭によつて贖うことも可能であり、そのときは一日につき八錢分を納入すればよいという原則があつた。また一方、同右六一—二簡（倉律）には

隸臣欲以人丁隣者二人贖、許之。其老当免老、小高五尺以下、及隸妾、欲以丁隣者一人贖、許之。贖者皆以男子、以其贖為隸臣。（五三—四頁）

とあり、ここでは成人男子（丁隣者）二人で隸臣一人を、一人で隸妾一人を贖い得るという規定が記されている。

右に挙げた諸例からは、男子を贖する方が女子を贖する場合よりも困難であつたことが窺えるが、少なくとも隸妾

に限つていうならば、爵二級、または男子の元辺五歳、または隸臣一人との間に等価交換が成立したと言える。以上により、隸妾は刑期五年未滿の有期刑であつたと言える。何故五年未滿かというと、前掲司空律に「興日を賞する母」とあり、身代わり労役の五年の中に、本来ならその期間中の代替者に課せられるべき繇役日数の合計が組み込まれていたと理解されるからである。

右が隸臣妾を刑期四年の有期刑とする筆者の最初の論の概要である。これに対して、労役刑の無期説乃至刑徒の世襲説に立つ堀敏一氏は、次の五点の疑問点を挙げている。（項目の標題は筆者が便宜的に加えた。）

① 男女の労働価値に関して

倉律によれば、丁男二人が隸臣となることで隸臣一人が解放され、丁男一人が隸臣となることで免老の隸臣、小隸臣及び隸妾一人が解放されるのが原則である。これに対して司空律は母及び姉妹を、そして軍爵律は実父母・故妻の隸妾を解放する場合である。ところが、（拙稿においては）この点をいっさい考慮しないで比較し、だから身代わりになる者が隸臣として終身の身分になるとする倉律の条は、司空律の辺境の労役五年による代替と矛盾する、従つて隸臣妾に有期の刑期があつた筈だという結論を出している。

② 隸臣と隸妾が等価か？

（拙稿では）軍爵律より爵二級が隸臣妾と等価値だとしているが、同じ軍爵律の後半では、隸臣が斬首の功によつて得た公士を返却することにより、その一級を以て故妻を解放し得る計算になる。また倉律によれば隸臣と隸妾の価値は同じでなかつた筈である。（よつて比較すべきでないものを強いて比較してもあまり意味はないということか？）

③ 一甲＝甲首一となる理由

(拙稿では) 商君書境内篇に「能得甲首一者、賞爵一級」とある故に、一甲が爵一級、二甲が爵二級であったことになるというが、秦簡という賞一盾・賞一甲・賞二甲などと表現される罰金の制は、がんらいは盾やよろいを罰として科したものであるのに、その一甲がどうして敵の首級を意味する「甲首一」に相当するのであろうか。

④ 農民の収入額と刑期との関連

(拙稿では) 一甲が二盾であり、二甲が四盾＝二万銭であるとし、これを年数に換算する際、『漢書』食貨志に李悝の言う一夫五口・治田百畝の農民の年間総収入四千五百銭を約五千銭とみて、爵二級・二万銭の隸臣妾は四年刑になるという。しかし農民の収入がどうして罰金刑や労役刑の基準になるのであろうか。

⑤ 四年の刑期と「元辺五歳」との間のズレについて

この四年刑という計算は、司空律の条文にいう「元辺五歳」との間にズレがあり、(拙稿では) このズレは五年という期間の中に兵役免除が含まれていたからであるという。しかし条文中には、この五年を「軍役期間に算定せず(母賞興日)」と明記されているではないか。

以上が堀氏よりの批判である。これに対する回答を記すに当って、予め断っておかなければならないことがある。堀氏の批判は拙稿「秦漢時代の労役刑——ことに隸臣妾の刑期について」⁽⁶³⁾に對してのものであり、これは本来ほぼ同時に発表した「秦漢時代の『完』刑について」⁽⁶⁴⁾の一章を独立させたものである。従って、堀氏への回答は既にその中に含まれている部分もあり、その後に発表した論の中にも含まれている。けれども本稿を筆者の労役刑有期説の

集大成とすべく、既発表の拙稿との間の多少の重複は承知の上で、提示された疑問の各項目ごとに、紙数の許す限り論議を尽くしたい。

① 男女の労働価値に関して

隸臣妾の代替を認める際に基準となつてゐるのは経済的価値のみとは限らないことに留意すべきであろう。堀氏の論法からすれば免隸臣と身長五尺以下の小隸臣とは（共に丁隣者一人で代替が可能という点から）等価であることになる。小隸臣とは身長六尺五寸（一尺は二十三センチメートル）未満の隸臣を指し、倉律ではこのうち五尺以下の者に限定して隸妾や免隸臣と同等に扱つてゐる。しかし、もし隸臣が終身であるならば、古い先の短い免隸臣と較べて、はるかに経済的価値はこちらの方が上であつて、等価とするのは経済的観点からは不合理である。両者が共に丁隣者一人が代わりに隸臣となることによつてあがなえるということは、その隸臣が有期であつたか、経済的原理とは別の原理が働いてゐたか、或いはその両方であつたかのいずれかであろう。いずれにしろ、無期刑たる隸臣妾を有限の「刃五歳」を以て代替できるというのは矛盾である。

また、隸臣一人をあがなうのに男子の丁隣者二人を要するというのは何故か。丁隣者には奴婢が含まれない筈であるから、ここに素朴な疑問として起こるのは、いくら封建的世の中とはいえ、人の刑をあがなうために、その一生を棒に振ることを他人に要求するのは、あまりにも苛酷ではないかということである。しかも、わずか爵二級があればすむところを、二人もの人の生涯を以て代替させるということが、果たして現実的であつたと言えるであらうか。しかしながら、隸臣妾が有期刑であつたとすれば話は別である。

ところで、代替の際に二人の丁隣者を要したのは何故か。それは、国家が等価交換プラスアルファの労働力を求

めた故であろう。と同時に、これによって無制限に代替が申請されることを牽制し、かつ代替の代替を事実上不可能とする意味もあつたと思われる。このように見ると、秦律における労役刑の代替や贖刑には、それなりの筋が通っていることが了解されるであろう。いずれにしても代替規定が無原則に定められているわけでは決していないのである。

なお、労役刑は無期であつても恩赦によつて赦免され得る可能性を残しているから、冗辺五歳等による代替を認めていたこととの間に矛盾はないとし、秦代の労役刑はむしろ不定期刑に近い、とする富谷氏の説がある。⁽⁶⁵⁾しかし、本来恩赦は、民衆が当てにすべき性質のものではなく、ましてそれを計算に入れて法が作られることも考え難い。ところが前章の⑧の項に述べたように、実際の秦律中には「贖耐」とか「贖黥」等の語があり、⁽⁶⁶⁾これらが具体的な金額を表現しているのである。とするならば、耐罪や黥罪の刑期が無期であつたり不定期であつたと考えるのは不合理ということになるのではなからうか。

② 隸臣と隸妾が等価か？

隸臣が斬首の功によつて公士となるのは「斬首一級につき爵一級」という『商君書』境内篇の原則からいえば、少なくとも二級以上斬首したことになる（公士と上造との間には一線が画されているようで——上造以上をその対象とした鬼薪白粲という刑名の設けられていることがそれを物語る——それ以上斬首しても隸臣は公士どまりで、上造以上にはなれなかったのかも知れない）。しかし、この公士の爵を返すことによつて隸妾たる故妻を免ずることを認めるのは、やはり家族倫理を優先させて家庭の維持を国家は督励しているのである。また仮に、経済的原理からは男子は女子の倍の価値が認められたとしても（債務労役の際は男女共に「日居八錢」であつたことに鑑みて、実際にはそうでなかつたと思われる）、軍爵律で自身の父母である隸臣と隸妾を同じく二級爵で贖することを認めているのは、

こうした家族倫理の上から、父親の解放を容易にするという意図を示しているとも言えるであろう。ここでも家族倫理を経済原理等に優先させている。なお、犯罪者の父母は高齢であることが予測されるから、高齢者については男女の差を設ける必要がなかったという見方も可能かも知れない。いずれにしろ秦律においては、法的な観点よりの等価交換という原則は貫かれていたと思われる。ただ、働き盛りの年代の成人男子については、これを倍額にすることによって国家が利を求めたものであろう。いずれにしても、わずか爵二級を以て無期刑を贖することが可能であったとは、とうてい考え難いのである。

③ 一甲⁶⁹甲首一となる理由

法律答問四八簡には

当貨盾没錢五千而失之、可論。当辭。(一七一頁)

とあり、この条によれば秦律においては盾が既に五千錢という金額を示す用語となっており、甲と盾との関係を示す效律五一簡に

官嗇夫賞二甲、令丞賞一甲。官嗇夫賞一甲、令丞賞一盾。(二三三頁)

とあることから、「二盾⁶⁹一甲」という関係であったことになり、従って、一甲の額は一万錢ということになる。一方、『商君書』境内篇には、戦闘における斬首の功によって、一級につき爵一級が与えられることを記して

能得甲首一級、賜爵一級、益田一頃、益宅九畝、云云。

とあり、爵一級につき田一頃が支給されるべきことが記されている。この田一頃の標準的価格は一万錢であったと見られる。⁽⁷⁰⁾そしてこの価格こそ爵一級分に付与された経済的価値であったと推測されるのである。時代はやや下るが、

漢の文帝期における爵の価格を知る手がかりとして『漢書』食貨志上には、水旱に際して納粟授爵によつて食糧危機を乗り切ることを文帝に提言した賈誼の語を記して

令民入粟⁽¹⁾迎、六百石爵上造、稍增至四千石為五大夫、万二千石為大庶長、各以多少級數為差。

とある。当時の日常穀価は一石当たり三十錢程度であつた。ただし、飢饉の時はこれより上昇したことは当然である。この賈誼の言に従つて文帝は粟六百石、即ち二万錢程度に対して二級爵たる上造を与えたのであるが、賈誼の觀念の中には、「爵一級一萬錢」というものがあつたと推定されるのである。⁽²⁾とするならば、この「爵一級一萬錢」という觀念は秦以來のものであつたという可能性が強い。従つて、この爵の額と贖刑額の基本単位である一甲の額とが一致することになるのである。これは単なる偶然として片付けることを許さない符合であると言えるのではあるまいか。右の考察からは、商鞅が刑罰と関連させて爵制を定めた時点より、爵一級を一萬錢と設定し、これと罰金額としての一甲の額とを等価ならしめたとする判断が導き出されるのである。では、一萬錢が當時にあつてどのような意味を持つ額であつたのかについては、次項で述べることにする。

④ 農民の収入額と刑期との関連

『漢書』食貨志⁽³⁾にいう李悝の言はは百歩一畝制に基づいた記述であり、青川木牘⁽⁴⁾の出土した現在では、四、五〇〇錢が秦においても標準的農家の総収入額であつたとする前稿での筆者の見解を修正している。即ち、商鞅の時期以來、秦では既に二四〇歩一畝制が採用されていたことが定説となつた。従つて、二四〇歩一畝制における一頃⁽⁵⁾の田からの收穫を換算すると、四、五〇〇錢の二・四倍で、約一萬錢となる。この標準的農家の収入については税制を作成する上では重要な基準となるべきものであり、法律、經濟、政治の諸分野にわたる制度の総合的な改革を行った商鞅が、

これを基準として用いたことは容易に察し得るところであろう。商鞅はかつて魏に滞在したこともあり、李悝の説いた「尽地力之教」の内容を知っていたことも確実と思われる。なお、戦国時代の魏や秦において田一頃^{（75）}の所有が実情とどの程度一致していたかは不明であるが、その額は理念としては既に定着していたと見て大過ないと思われる。

さて、この一万銭が経済活動における基準となっていたことを物語る史料として、同じく『漢書』食貨志下には

黄金方寸、而重一斤^{（76）}。

とあり、純金の一立法寸がほぼ一斤（約二五〇グラム）であったことが記されている。金一斤を一金といい、漢代ではこれが一万銭であった。恐らくそれは秦においても同じであったと思われる。その価格が一体何によって決まったのか。農業による租税収入を財政の基盤に据えた社会であつてみれば、標準的農家における年間収入こそがその基礎的単位であつた。このように考えるのは極めて妥当なことではなからうか。しかもこれが一万銭というスッキリとした数値の近似値をとるにおいてをや。しかして爵制と刑制とを定めた商鞅が、後に経済の基準単位ともなったこの数値を、その基準の額として定めたというのが筆者の理解である。爵制と刑制との関連は『漢旧儀』にも指摘するところであり、爵の単位と贖刑の基準額とを等しくしたのはむしろ当然とも言えるのではなからうか。

なお、『商君書』境内篇にいう「能得甲首一」の甲首とは、「かぶとくび」とは考え難い。戦闘に参加した一兵卒がこれを斬ることは、限りなく不可能に近いからである。ここが「能得爵首一」となっている版本があることを考慮すると、甲首の甲とは軍事と爵制と刑制とにまたがる特殊用語であつたと理解できる。つまり、甲には一万銭という価格が設定されており、戦闘において爵一級相当の敵首を獲得することを「得甲（爵）首」と表現し、爵一級を一甲の額と等価ならしめたと見られるのである。

⑤ 四年の刑期と「冗辺五歳」との間のズレについて

隸臣妾が四年刑であつたとする判断の根拠については、次章に述べるので省略するが、ここでは四年という刑期と「冗辺五歳」との間に一年の差がある理由についてのみ述べる。これについては合理的な説明が可能である。司空律に「母賞興日」とある興日とは兵役を指すと言うよりは、秦律十八種の繇律の場合と同じく、繇役を指していたと考へるべきであろう（但し、秦律においては兵役と繇役とは未分化であつたと見られる。⁽⁷⁶⁾）しかしてその繇役の日数については董仲舒が

古者（中略）使民不過三日、（中略）至秦不然。用商鞅之法、改帝王之制、（中略）三十倍於古。（『漢書』食貨志上）

と述べるように、年間最大九十日であつたと見られる。そうすると本来四年であつた隸妾の刑を代替すると、その間に課せられるべき三百六十日、つまり一年分の繇役が未納となる。その故に、予めこれを代替の期間に組み込むことによって「冗辺五歳」の年数が定められたと見られるのである。そして更に、組み込まれるべき一年分についても本来ならば更に九十日分の繇役が課せられるべきではあるが、それについては免除する、というのが「興日は賞（償）せしむる母く」の意味するところであつたと理解されるのである。

なお、右の理解が認められるとするならば、純粹に代替の爲の男子の労役期間は隸妾の刑期と一対一対応をしていることになる。従つて、隸妾の刑期が四年であつたとするならば、隸臣の刑期も同じく四年であつたことも疑いない。但し、刑罰は男子を主たる対象としており、男子に対して厳しく、女子や老人や幼少者に対しては比較的寛大となっている。従つて、身内の隸妾は「冗辺五歳」の労役によって代替可能であるが、他人の場合は隸臣が丁隣者二人、隸妾や免老や幼少の者は一人の代替者によって免ぜられたのである。

以上五点にわたつて前稿の足らざるところを補足した。隸臣妾が論議の焦点となつてゐる故に、これ以外の労役刑の刑期については後章にまわすこととする。いずれにせよ、隸臣妾が刑期数年の有期刑であることを前提として見るならば、贖刑制をはじめとする秦律の諸制度がたいそう合理的なものとして理解されるのである。

四 滋賀説批判

次に『東方学』誌上に發表された滋賀秀三氏の秦漢労役刑に関する見解⁽⁷⁷⁾を紹介する。同氏は秦律における隸臣妾等の労役刑が無期刑であり、文帝によつて初めて刑期が設定されたという前提に立ち、肉刑廃止に関する『漢書』刑法志の条文には脱落があつたとして、これを補つて次のように解している。

罪人獄已決、①完為城旦春滿三歲、為鬼薪白粲。鬼薪白粲一歲、免為庶人。②鬼薪白粲滿二歲、為隸臣妾。隸臣妾一歲、免為庶人。③隸臣妾滿二歲、為司寇（作如司寇）。司寇（作如司寇）一歲、（免為庶人。）④及（司寇）作如司寇二歲、皆免為庶人。（へ）内を補つた滋賀氏の解釈。「は意味上の段落、（へ）内は筆者による補足」

即ち、冒頭の「罪人の獄已に決すれば」という一句に、「今後判決を受ける者は」及び「既決囚は判決を受けた時点から起算して」という二つの意味が込められている、として滋賀氏は、これが新たに設けられた刑期の規定を含む措置であるとする。そして次のように本文を四段に分けて解釈するのである。

- ① 完城旦春は三年服役すれば鬼薪白粲とし、鬼薪白粲に一年服役させた上で放免する。合計して刑期四年。
- ② 鬼薪白粲は二年服役すれば隸臣妾とし、隸臣妾に一年服役させた上で放免する。合計して三年。

③ 隸臣妾は二年服役すれば（司寇または作如司寇）とし、司寇（または作如司寇）に一年服役させた上で放免する。合計して刑期三年。

④ 司寇・作如司寇は二年服役すれば放免する。すなわち刑期二年。

さて、この滋賀氏の解釈においてまず疑問となるのは②段である。即ち鬼薪白粲満二歳の者を何故隸臣妾に移さねばならなかったか、という点である。というのは、前章での考察によれば、鬼薪白粲はもともと爵を有していた者の就く刑であり、一般的犯罪者の就く隸臣妾よりも軽い筈である。その鬼薪白粲を隸臣妾に移すことの必然性が説明されていないのである。そしてより重大な疑問は、①②③に見られるような刑徒の移行規定が何故設けられなければならないのか、という問題であろう。これについても滋賀氏は何も述べてはいない。

この問題を追究するに当って、予め把握しておかなければならないことがある。それは冒頭に「罪人の獄已に決し、完して城旦舂と為して」とある「完」とは何かということである。これが解けなければ①②④の規定の設けられた意図は明らかとならないであろう。

さて、「完」の語義を示す秦律十八種十五七簡（軍爵律）には

工隸臣斬首及人為斬首以免者、皆令為工。其不完者、以為隱官工。（九三頁）

とある。即ち、戦闘における斬首の功によって免罪された「不完」の職人は「隱官の工」となるといふ。隱官とは、法律答問一二五簡に

已刑者、処隱官。（二〇五頁）

とあるように、肉刑を受けて身体に残欠のある人々を收容して働かせる官営工房である。その際留意すべきことは、「已に刑せられし者」とは、肉刑を受けてはいるが、身分的には自由人であるということである。身分は自由人であつ

ても、一度肉刑を受けた者は、その罪が免ぜられた後も、元通りの社会復帰は不可能であつたと思われる。その故に彼らを受け入れる為の施設が設けられていたことをこれらの史料が示している。

一方、その逆に、肉刑を受けていない状態が「完」であると考えられる。従つて、完刑⁽⁷⁸⁾とは、将来の社会復帰の可能を見込んだ罪名であつたと推測されるのである。実は秦律中に、この完を冠する刑名が、完城旦舂以外にも存在していたのである。即ち法律答問一七四簡に

女子為隸臣妻、有子焉、今隸臣死、女子北其子、以為非隸臣子。女子論可。或黥顔頰為隸妾、或曰完。完之当毆。(二三五頁)

とある。右文中の「或曰完」とは、その文脈から見て「或いは曰く、完して隸妾と為せ(完為隸妾)。」を略したものと判断される。よつて、秦律中には完隸妾という完刑が存在していたことになり、同時に完隸臣の存在も疑う余地のないところである。また、秦律十八種一九三簡(内史雜律)には

□司寇及群下吏、毋敢為官府左史、及禁苑憲盜。(二〇七頁)

とある。最初の文字は整理小組は「矣(侯)」と判読している。しかし、「侯・司寇及群下吏」では漢文の用法としても不適切であると言わねばならない。複数の刑徒名を示す「群下吏」の前に来るのは最も重いか或いは逆に最も軽い代表名の筈であつて、「それ以下(または以上)の刑徒」という意味を表すのが「群下吏」でなければならぬ。故に司寇の上の字は司寇と並列する刑名ではなくて、単にこれを修飾する文字たるべきであらう。故にこれは「完」字と見るのが妥当といえる(写真版を参照)。よつて秦律中には、完司寇という完刑も存在したことになるのである。

ところで、肉刑廃止に関する前掲『漢書』刑法志の直前に

諸の完に當つべき者は完して城旦舂と為せ(諸当完者、完為城旦舂)。

とあるのであるが、完刑が複数あったということであれば、この秦律を引き継いでそれまで複数存した完刑を、完城旦舂のみに統一し、これ以外の完刑を廃止することがその意味する内容であつたと理解されるであろう。そうすると、刑徒の人数に変動が生ずることが考えられ、それまで保たれてきた労働形態の秩序にアンバランスが起こり得る。その故に、完刑の刑徒について、前掲刑法志の如き移行措置が必要となつたと解されるのである。

とするならば、前掲刑法志の冒頭部は「罪人の獄已に完に決して」と読むべきではあるまいか。そしてこの語は直後の「城旦舂満三歳」のみならず、後の「隸臣妾満二歳」にも掛かっていると理解すべきではなからうか。

さて、志賀氏は刑法志中には脱落があつたとして本文を解釈したのであるが、筆者の解釈によるならば、脱落や誤写はなかつたものとして、刑法志本文を以下に記すように理解することが可能となるのである。

ここで、前述のように、文書に同じ文字や語句が並ぶときには、繰り返し記号が用いられたことを想起されたい。そうすると、刑法志本文所掲の肉刑廃止を上奏したオリジナルの上奏文にも繰り返し記号は用いられていた筈である。そして、筆者の理解に基づいて本文の構造を示すと、以下のようになつていたと思われる。

罪人獄已決完

城旦舂満三歳	為鬼 _ニ 薪 _ニ 白 _ニ 粲 _ニ 一歳	免為庶人。
為	為隸 _ニ 臣 _ニ 妾 _ニ 一歳	
隸臣妾満二歳為司寇 _ニ 一歳	及	皆免為庶人。
作如司寇 _ニ 二歳		

即ち、完刑を論告されて服役中の刑徒の内、城旦舂で満三年になる者は鬼薪白粲⁽⁷⁹⁾または隸臣妾に移し、それぞれ一年の労役をさせ、しかる後に免じて庶人とする。次に、同じく完刑の刑徒の内、隸臣妾となつて満二年になる者は司寇に移し、司寇一年または作如司寇二年の残りの刑期を終了すれば、すべて免じて自由人とする、と解されるのである。この解釈に従うならば、完城旦舂も完隸臣妾⁽⁸⁰⁾も当初より四年刑であつたが故に、服役してより丸四年後に免ぜられることになるのである。

ちなみに、文帝の改革以前の城旦舂や隸臣妾が、無期乃至終身刑であつたとすれば、この措置によつて、それぞれの刑徒間の人数比にどのような変化が生ずるかを考えてみる。『史記』や『漢書』による限り、文帝二年よりこの十三年までの十二年の間に大赦令の出されたという史料はなく、従つて、城旦舂や隸臣妾の刑徒中には、服役十年を越える者も多数いたことになり、刑法改革の行われた十三年の時点で満三(二)歳の者はすべて一律に扱われたことになった。よつて城旦舂の中の隸臣妾(及び鬼薪白粲)に移行されるべき者の人数は、未満三歳の者に較べて、圧倒的多数になつたであろう。そして移行されて隸臣妾(及び鬼薪白粲)となつた者はその期間が一年であるために、その人数が翌年には逆に激減することになる。(隸臣妾から司寇に移行させられる者と隸臣妾との間にも同様のアンバランスが生ずるであろう。)これでは刑徒の監督する側とされる側との間の人数比のバランスを配慮した前掲一四六―七簡司空律(八九頁)の理念は完全に破綻を来すことになるではないか。そうなると刑徒間の秩序など保つべくもない。加之、ことに服役満四年以上の刑徒たちの中には、拭い難い不公平感が生ずることになるであろう。もしこの改革がこうした問題点を考慮することなしに行われたとすれば、そこにはさまざまのひずみの生ずることは避けられなかつたのではなからうか。

ここで発想を転じて、完刑がもともと有期刑であつたと考えてみる。そうすると、前掲刑法志の文章は生き生きと

現実味を帯びて蘇生することになり、ことに「満三歳」とか「満二歳」と記される服役年数に意味が出て来るのである。そして、この上奏文中に記す移行措置によって、その年と翌年翌々年及び四年後に至るまで、刑徒間の、ことに（完刑を統一したために）圧倒的多数を占めることになるであろう城旦舂に対する司寇や隸臣妾の人数比のバランスをほとんど崩すことなく、移行措置を終えることができる。そして丸四年後には、旧刑法下での「完城旦舂満三歳」の者はいなくなり、新たな体制への切り替えが完了していることになる。⁽⁸¹⁾このように、完刑が四年刑であるとの前提に立つならば、新体制への移行がスムーズに行えるようにとの配慮が、奏文中より明瞭に読み取れるのである。また、移行期間として四年を要したということが、旧制度下にあつても完刑は確かに四年刑であつたことを裏付けているといえるであろう。

以上の考察により、文帝期以前の秦漢律において労役刑が無期刑であつたと前提し、前掲の刑法志が新たな刑期を規定したものとする滋賀氏の見解には再考の余地があることを示し得たものと思う。

五 秦律における刑罪・完刑・耐罪

秦律においては城旦舂、隸臣妾、鬼薪白粲という労役刑名であつても、それぞれには肉刑の伴う刑罪としての場合と、肉刑の伴わない完刑及び耐罪としての場合とがあつた。司寇においては完刑と耐罪とがあり、そのほか侯については耐罪のみが確認されている。

そこでまず、完刑の意義について再度確認しておきたい。秦律中には、耐罪の他に「完刑」なる刑名の存したこと(82)は前述した通りであるが、刑罰の主流を占めるのは肉刑であつた。⁽⁸²⁾黥をはじめとする肉刑を受けるとなれば、受刑の

際の痛苦は言うに及ばず、一度これが施されたならば肉体的にも社会的にも、元の状態に復することは不可能となる。この悲惨さを除去するところにこそ、完刑の設けられるべき必然性があつた筈である。「完」の語を記す『漢書』卷二、恵帝紀の即位年の詔に「民七十以上、若不満十歳、有罪当刑者、皆完之。」とあり、ここに付された後漢の孟康注に

不加肉刑、髡鬻也。

とある。⁽⁸³⁾これにより、完刑には頭髮を剃る髡鬻という付加刑が伴つたことが知られる。しかし、頭髮だけならこれを切つても身体に苦痛があるわけではなく、また数年経てば元の状態に復するであろう。このことは、いみじくも完刑が有期刑であつたことを象徴しているが、一方、前述のように、一度肉刑を受けた者はたとえ刑が免ぜられても、もはや自由人としての社会復帰は現実には不可能となるのである。

次に、耐罪の意義について確認しておく。『史記』卷二一八の淮南王伝に「有耐罪以上、赦令除其罪」とある箇所の『集解』注に

応劭曰「輕罪不至於髡完、其耐鬻故曰耐、古耐字從彡、髮膚之意。」杜林以為「法度之字皆從寸、後改如是、耐音若能。」如淳曰「律、耐為司寇、耐為鬼薪白粲、耐猶任也。」蘇林曰「一歳為罰作、二歳刑已上為耐、耐能任其罪。」とある。⁽⁸⁴⁾ここに「其の耐鬻（を去る）故に耐と曰ふ」と記されるように、⁽⁸⁵⁾應劭は、耐罪者は髡剃りの上で勞役に就けられたと認識していた。秦律における耐が實際の髡剃りを伴つたことは、後掲する法律答問に「行其耐」⁽⁸⁶⁾とある語からも窺える。しかし、耐罪に髡剃りが伴うという慣習は、⁽⁸⁷⁾應劭の生きた後漢には既になくなつていたと考えられる。だからこそ現時では一般に不明となつてしまつた「耐」の語源を説明する必要があつたのではなからうか。さらに如淳や蘇林に至つては、その語源に関する意識すらなくなつていたと解せられ、やがて耐罪は二年刑以上の勞役刑の呼

称であつたと見られるようになるのである。但し、秦代の耐罪は二年刑ではなく、三年刑であつた。後述するように、文帝の刑法改革の際に刑期に変更が加えられ、刑期と刑名とが対応するように改変されたのである。

右の考察を前提として、再び『漢旧儀』を見てみよう。そこには

秦制二十爵、男子賜爵一級以上、有罪以減。年五十六免。無爵為士伍、年六十乃免老、有罪各尽其刑。(中略)凡有罪男髡鉗為城旦(中略)女為舂(中略)皆作五歲。完四歲。鬼薪三歲。(中略)司寇(中略)作二歲。

とある。著者衛宏は前漢末の生まれであるから、この内容にはかなりの信憑性がある。確かに彼が、漢代の用語を使つて秦制を表現した部分も認められる。(例えば文帝時に設けられたと見られる髡鉗城旦舂が秦代に存在していたかのような記述になっている。)しかし、そのことは必ずしも秦律に対する彼の無知を示すものではない。後世の我々の留意すべきは、それよりも、城旦舂を初めとする秦代の各種勞役刑を、衛宏が明確に有期刑と認識していたという事実ではなからうか。「罪有らば各々其の刑を尽くす(有罪各尽其刑)」とはまさに刑期の存在を前提とした記述であり、爵を以て刑を贖えるのも、その刑が有期のものであつたからこそではないか。

この衛宏の認識は決して独断によるものではなかつた。そのことは右の傍線部と同内容を記す『商君書』境内篇に爵自二級以上、有刑罪則貶。爵自一級以下、有刑罪則已。

とある記述からも明らかである。つまり、『漢旧儀』傍線部は、右の境内篇の内容をより簡略に表記したものと考えられるのである。境内篇にいう「刑罪有れば則ち貶としめ」の「貶」は『漢旧儀』にいう「減」と同義と認められる。では後半の「爵一級より以下は刑罪あれば則ち已む。」はどのような意味をもつのであろうか。

まず、「爵自一級以下」とは士伍を含んだ表現であることに留意したい。即ち爵一級の者(公士)及び無爵者(士伍)である。もし仮に、公士が刑罪を犯せばその爵を返上することによって刑を免ずる、という内容であつたならば「自

……以下」の三文字は不要の筈である。従つて、「爵自一級以下、有刑罪則已」の「已」とは、単に無くなることを意味するだけではなく、不足するというニュアンスが込められていると見られるのである。その際参照すべき史料として法律答問一八五簡には

内公孫無爵者当贖刑、得比公士贖耐不得。得比焉。(二三一頁)

とある。即ち(無爵者には本来贖刑の特典は認められないが)、王室の子孫の場合は爵がなくても、一級爵を有する公士の「贖耐」の場合に準ずることを認めるというのである。爵の場合と違つて、内公孫という身分を贖刑のために返上するというわけには行かない。かといつて内公孫が罪を犯してこれに贖刑が許される場合にも無償で贖刑が認められたとは考え難い。とするならば、内公孫という身分によつて爵一級相当分だけ罪が減じられ、残りが金銭等で支払われたと見るのが妥当ではなからうか。このことは公士という一級爵が「贖耐」の額に不足するということも同時に表現していると言えるであらう。

右のように理解するならば、境内篇の記述から、爵一級は最小限の刑期と考えられる耐罪を贖うにも不足であり、逆に爵二級以上であれば、最も軽い刑罪を贖つてもまだマイナスとはならなかつたと推測されるのである。そしてその最小限の刑期が爵一級相当と爵二級相当との中間に存したと思われ、これが即ち耐罪であつたのではなからうか。

もしそうであれば、隸臣妾を初めとする完刑が四年刑で、これを爵二級によつて贖うことが可能であつたのだから、爵一級が刑期二年分に相当するという原則があつたと判断され、従つて、耐罪は、爵二級相当と一級相当との中間に位置し、その刑期は三年であつたと解されるのである。もしこれが認められるならば、秦律雜抄三二簡に「贖耐」と表現された額(即ち一甲一盾)は、この耐罪を贖するための金額であつたと理解されるのである。⁽⁸⁸⁾

ところで、漢は秦王朝を少なくとも理念上は否定的に継承した王朝である故に、法制においても、秦の否定的側面

については比較的多く伝えられている。例えば『史記』孝文本紀、元年十二月の条には、文帝が収帑律を除去したことを記しており、司馬貞の『集解』に、この部分の注釈として後漢の応劭を引用して

帑子也。秦法、一人有罪、並坐其家室。今除此律。

とある。これは『史記』や『漢書』の本文には見られない記述であり、従って、後世の我々にとつては『睡虎地秦墓竹簡』の出土以前においては、文帝の除去したという収帑律の実態が必ずしも明らかではなかった。しかし、その内容が重要であれば、このように注釈として後世に残されゆくものである。しかるに、これと同等に重要であるべき秦代の刑徒の無期刑たる事実を明記する記事は全く伝えられてはいない。もし、秦代の労役刑がすべて無期刑であったとするならば、その事実が直接的に記されることもなく、また伝承もされなかったことが、あまりにも不可解なことと言わねばなるまい。

従って、衛宏が秦代の刑徒が無期であったとは記さず、しかも秦制に由来する労役刑の刑期について「完四歳」と記したという事実は無視することができないのである。秦制を踏襲した初期の漢律において、城旦舂に代表される完刑が四年の有期刑であったというのが、前漢知識人の恐らくは普遍的認識であったであろう。

一方、耐罪の刑期については、前述の如く三年刑であったと推測される。従って『漢旧儀』に「鬼薪三歳」とあるのは、衛宏が鬼薪に耐罪を代表せしめたものと考えられるのである。なお、文帝の刑法改革により、鬼薪白粲及び隸臣妾の刑名は、肉刑を伴う刑罪としてのもののみならず、完刑としてもなくなり、残ったのは耐罪としてのもののみであった。更にこのうちの隸臣妾は、武帝期を最後として史上から姿を消すのである。

なお、司寇については刑法改革の時点より二年刑として用いられ、これを衛宏が「司寇（中略）作二歳」と表記したものと考えられる。このように、文帝の改革を期に、それまでは刑名と刑期の組み合わせの複雑であった労役刑の

体系が簡素化され、原則として刑名と刑期とが対応するようになった。「有年にして免ぜよ。」という文帝の意図は、ここに結実することとなったのである。

最後に刑法改革以前の刑城旦舂の刑期について述べる。改革の内容を記す前掲刑法志の続きに

前例之刑城旦舂歲、而非禁錮者、如完為城旦舂、歲數以免。

とある。禁錮⁽⁸⁹⁾を宣告された者でなければ、改革以前の刑城旦舂（黥等の肉刑を伴う城旦舂）として服役してより一年を経過すれば完城旦舂扱いとし、刑期（一年分）は免ずることとす、という内容である。右文中の「如完為城旦舂」の如は「作如司寇」の如と通ずるもので、作如司寇という名称を用いたのは、隸臣妾で満二歳の者を司寇扱いとして残り（二年）の刑期を終えさせるという趣旨であつたと思われる。司寇は新たに二年刑として定められたのであるが、完城旦舂の場合はずもとと四年刑であつた。その故に、完城旦舂扱いとなつた刑徒は、その四年後に刑を免ぜられる。これが「歲數は以て免ず」の意味するところであつた。⁽⁹¹⁾

ところで右の内容からは「前例之刑城旦舂」が有期刑であつたことは明らかと言えよう。その刑期はといえば、一プラス四プラス α 年であり、この α 年が「以て免」ぜられたことになる。では、その α の数値如何。それを示唆する史料として法律答問一〇九簡には

葆子獄未断而誣告人、其罪当刑為隸臣、勿刑、行其耐、有繫城旦六歲。（一九八頁）

とある。葆子⁽⁹²⁾という身分の者が自ら罪を犯し、かつ他人を刑隸臣相当の罪を以て誣告した場合、（本来ならば誣告反坐⁽⁹³⁾が適用されるべきところであるが、葆子の身分に免じて）肉刑は施さないで、城旦として拘束し六年間勞役させよ（繫城旦六歲）、というのがその内容である。もし一般人であれば刑城旦舂とすべきところであり、葆子である故にその肉刑は免じて耐するが、刑期としては本来の六年を科すべし、という趣旨であると考えられる。即ち、刑城旦舂を初

めとする刑罪は、六年刑であつたと解せられ、従つて、新刑法の施行によつて減ぜられる α 年とは一年であつたことになる。

では、何故このような措置が採られたのか。それは刑城旦舂を廃して新たに設けられた髡鉗城旦舂が五年刑であつたことと関連する。例えばもし、改革以前に刑城旦舂として服役していた者の刑期終了が、新参である髡鉗城旦舂の服役者より遅れるとすれば、旧刑徒は耐え難い不公平感を懐くことになるであらう。その故に服役中の刑城旦舂の刑期を短縮する必要があつた。よつて彼らが服役してより丸五年後に刑を終了することとした。こうして刑期を一年短縮したことを「歳数以免」と表現したと解せられるのである。なお、この移行措置は四年後に旧刑法による刑徒がいなくなるることによつて終了することになるであらう。⁹⁴繰り返すが、こうした移行措置は、秦律以来の労役刑が有期刑であつたからこそ必要であつたのであり、そうでなければ全く不可解な措置であつたと言わねばなるまい。

結 び

以上の検討によれば、隸臣妾をはじめとする秦律における労役刑が無期乃至終身刑であつたとする説には、確かな根拠がなかったということが明らかであらう。秦律における諸の労役刑が有期刑であつたとする筆者の論拠を整理すると、おおよそ次の十二項目となる。

① 「元辺五歳」について

秦律十八種一五二—三簡（司空律）に

百姓の母及び同姓の隸妾と為れるありて適罪に非ずして元辺五歳を為し、興日を償することなく、以て一人を免

じて庶人と為さんと欲すれば之を許せ。●或いは遷を贖し、錢を入れんと欲する者は、日ごとに八錢。(九一頁)とあり、隸妾一人を二親等以内の男子が「冗辺五歳」という労役によつて贖うことができ、しかも辺境での労役の代わりに日に八錢を納入することによつて、これを贖うことが可能であつた。もしも隸(臣)妾が無期刑であつたなら、このようなことはまず有り得ない。しかも次項に挙げる倉律では「隸妾の丁隣者一人を以て贖はんと欲すれば之を許せ、(五四頁)」とあり、隸妾は丁隣者一人が身代わりに隸臣となることによつて免じ得ることを示している。身内であればわずか五年の労役で免ぜられるのに、丁隣者だと終身の労役をしなければならぬ、というのは余りにも不合理である。よつて、隸臣が刑期五年以内の有期刑であつたことは当然といえるであらう。

② 小隸臣と免隸臣の身代わり労役

倉律(同右六一簡)に

隸臣は丁隣者二人を以て贖はんと欲すれば之を許せ。其の老の免老に当るもの・小の高さ五尺以下及び隸妾、丁隣者一人を以て贖はんと欲すれば之を許せ。贖者は皆男子を以てし、其の贖を以て隸臣と為す。(五三―五四頁)

とあり、身長五尺以下の小隸臣は免老の年齢に達した隸臣と同じく、隸臣一般の半分の代償を以て免じ得たことが知られるのである。ここで、隸臣が終身身分であつたと仮定してみよう。身長五尺以下の隸臣は確かに今は労働力としての価値は成人の半分程度かも知れない。しかし、数年後に成人することは眼に見えており、これを老い先の短い免隸臣と同列に扱うことは、少なくとも経済的観点からは不合理である。更に、身長五尺以上と断つてゐるのは何故かを考えてみる。右倉律の記述から判断すると、身長六尺五寸く五尺の小隸臣については、隸臣一般と同扱いであつたことになる。即ち、成人者か未成人者かの区別ではなく、身長が五尺を越えるか否かが身代わりの代償一人か二人か

の基準となっているのである。この問題から次の結論が導き出されるであろう。つまり、隸臣には数年の刑期があったのであり、そうすると当初五尺であつた小隸臣は刑期終了時点でもまだ身長は六尺五寸を越えないことが見込まれる。だからこそ身長五尺以下の小隸臣を、五尺以上の者と区別する必要がある、労働価をその半額と見なし得たのであろう。いずれにしても、隸臣に刑期がなかったとすれば、五尺を基準とすることの理由が見出せないのではなからうか。

③ 爵二級で隸臣妾が免じ得ること

秦律十八種一五六—七簡（軍爵律）に

爵二級を帰して以て親父母の隸臣妾と為れる者一人（中略）を免ぜんと欲すれば之を許し免じて以て庶人と為せ。
（九三頁）

とあり、父または母であれば、二級の爵で隸臣妾の刑を贖うことを認めているのである。筆者の理解によれば、爵の経済的価値は一級につき一万錢程度であり、爵二級という額が終身刑を贖うには安すぎる。なぜならば、当時の標準的農家における年間総収入が一万錢程度であり、爵二級分が庶民に手の届かぬ額では決してなかったからである。従つて、爵二級という有限のものを以て贖い得る隸臣妾が有期のものであつたことは疑い難いのである。

④ 『商君書』境内篇の記述について

『商君書』境内篇には

爵二級以上ならば、刑罪あれば則ち貶しめ、爵一級より以下ならば刑罪あれば則ち已む。

とあり、二級爵を有する者は罪によつて爵を減ずるのに、一級爵以下の者は罪によつて爵がなくなつてしまふという。ここに爵一級相当と爵二級との中間に位置する勞役刑が存したことが予測される。これが耐罪であつたと思われる。そうすると、二級爵を以て贖し得た(完)隸臣妾はその耐罪よりも重い刑であつたことになる。(完)隸臣妾が有期刑であれば、これよりも軽い耐罪は、これより刑期の短い有期刑であつたことになるであらう。

⑤ 『漢旧儀』の記述について

衛宏は『漢旧儀』において、商鞅爵制との関連において勞役刑の起源を論じており、漢に引き継がれる以前の秦制においても勞役刑は有期であつたことを認めている。この記述は『商君書』境内篇の他に、『睡虎地秦墓竹簡』の軍爵律の出土によつて、その信憑性は以前にも増して高くなつてゐる。衛宏は商鞅爵と刑の減免との関連について記しており、免老の犯罪者についても「各尽其刑」と述べ、秦律に刑期が存したことを前提としている。「刑を尽くす」というのが刑期終了までの勞役を指すことは言うまでもない。少なくとも衛宏には、秦制に刑期がなかつたという認識のないことは確かである。更に衛宏は「完四歳」と記してあり、完城旦舂等の完刑が四年刑であつたという認識を示しているのである。

⑥ 完刑の存在と刑徒の社会復帰

秦律中には「完(為)城旦」の語が九箇所あり、この他に「完隸(臣)妾」(法律答問一七四簡、二二五頁)「完司寇」(内史雜律一〇七頁)の語も見られ、衛宏のいうように秦代に完刑が存在したことは明らかとなつた。完という刑罰用語は、軍爵律に「其の不完なる者は以て隱官の工と為せ」(九三頁)とあることから知られるように、肉刑を受け

て身体に残欠のないことを意味した。身体に黥等の肉刑がなければ、受刑者の社会復帰もある程度スムーズに行くと考えられ、秦律に完刑が存在したこと自体が、その有期刑であったことを物語っているのである。漢代になって、肉刑を廃止するに当り、文帝は

今法に肉刑三有り、(中略)今人過有れば、教未だ施されずして刑已に加へらる。或いは行を改め善を為さんと欲するも、しかも道よりて至るなし。(『漢書』刑法志)

と詔している。右は刑の施行によつて受刑者の社会復帰への道が閉ざされていたという事実を示しており、これを裏返していうならば、肉刑の施行さえなければ罪人の社会復帰が可能であったことを示している。即ち、秦律における完刑の存在は、秦代の労役刑が都て終身のものであったわけではないことを証している。

なお、文帝による改革以前の秦漢律において、すべての刑が有期刑であったとする確証があるわけではない。しかし、その逆に、犯罪者＝終身労役者であったという証拠もないのである。法律答問一二五簡には

人を将司して亡し、能く自ら捕え及び親ら智る所の捕ふを為せば、除きて罪する母れ(除母罪)。已に刑せられたる者は隠官に処せよ。(二〇五頁)

とある。則ち、肉刑を施されて後に罪を許された者は隠官において用いる、というのである。この例からも知られるように、犯罪者が刑の終了後に、元通りの立場に復帰できるとは必ずしも限らなかった。しかし、受刑の後に隠官で働くことが即ち刑の無期であったことを意味するものではない。彼らは罪を免ぜられたにもかかわらず既に(肉)刑を施されてしまったのであるから、国家としては彼らの働き口を保障しなければならなかったものであろう。一度肉刑を施された者は、元通り共同体構成員として社会復帰することができなかった故ではなからうか。恐らくこれは、秦漢を通じてのしきたりであったと思われる。

⑦ 文帝の改革による移行措置

刑法改革に伴って、完刑の刑徒に対して次のような移行措置が採られた。即ち『漢書』刑法志に

罪人の獄已に完に決して、城旦舂と為りて三歳に満つれば、鬼薪白粲と為る者は鬼薪白粲一歳、隸臣妾と為る者は隸臣妾一歳にて免じて庶人と為せ。隸臣妾二歳に満つれば司寇となし、司寇一歳及び作如司寇二歳にて皆免じて庶人と為せ。

とある通りである。これは改革に伴う刑徒数の変動に対応するための措置と見なされ、この移行措置は丸四年後に完了することになる。従って、改革以前における完刑は、やはり秦律におけると同じく四年刑であったことになるであろう。四年後には、旧刑法による完刑の刑徒はいなくなり、これが即ち移行措置の完了と見られるのである。

⑧ 「歳数以免」について

前項の完刑刑徒の移行措置に続いて採られた刑城旦舂⁽⁹⁵⁾の移行措置として同志には

前令の刑城旦舂歳にして禁錮に非ざる者は完為城旦舂の如くして、歳数は以て免ぜよ。

とある。「前令の刑城旦舂（一）歳」の者に対して「歳数は以て免ぜよ」としたのは何故か。もし文帝十三年の時点で「前令の刑城旦舂」に刑期がなかったとすれば、このような表現は絶対に取り得ないであろう。もともと刑期があったからこそ、その刑期の年数を減じ得るのではないか。

なお、刑徒の無期説を採る人々は、文帝の刑法改革の時点で初めて刑期が設けられたのだという。しかし、もしそうであれば刑城旦舂の者の「歳数」を免ぜよ、という筈がない。何故ならば、無期のものについてその年数を免ぜよと命ずる道理がないからである。更にいうならば、無期説論者の唯一の積極的論拠として挙げられる史料としては文

帝に関する「有年而免（刑法志）」および「罪人有期（晁錯伝）」の語であり、これを除いては存在しない。しかし、これらは刑期の不存在を示したのではなく、文帝によって刑名と刑期とが対応するよう刑罰体系を整理したことを意味した筈である。以上の検討により、文帝期以前に刑期がなかったという説は、証拠不十分であると評さねばなるまい。

⑨ 「繫城旦六歳」について

法律答問一一八簡に

耐為隸臣に当りて司寇を以て誣人すれば論をいかん。耐為隸臣に当て、また城旦に繋ぐこと六歳。（二〇二頁）

とあり、本人の耐隸臣相当の罪に司寇相当の誣告罪が加わることによって、その量刑は隸臣のままではあるけれども、これに城旦六歳を付加するというのである。林文慶氏等は、これは付加刑としての城旦六歳であるから、この「六歳」が城旦の刑期を示すものではないと主調する。しかし司空律や工人程等によれば、隸臣や債務労役の一般人でさえ城旦と同一の労役に就くことが希ではなかったことが知られる。従って、城旦に繋がるというのは刑徒としての労役させられることは意味しても、そのこと自体に付加刑としての意味はなかったと考えられる。従って、付加刑としての意味を有するのは「六歳」という期間の部分であつたことになるであらう。故に、もし隸臣が無期刑であれば「繫城旦六歳」には付加刑たる意味がないことになる。右文に意味があるとすれば、隸臣が刑期六年未満の有期刑でなければならず、またそのことは、誣告した司寇という刑名についても同様に言えるのである。つまり、耐罪としての隸臣及び司寇の刑期が併合されることによって「六歳」という年数が定まったと解釈される。この六歳という期間は、たまたま黥城旦舂を初めとする犯罪の刑期と一致するのである。

⑩ 「贖耐」及び「贖黥」の語について

秦律雜抄三二—三簡に

赦童を匿する及び癢を占して不審あれば典老は贖耐。●百姓を老に当てず、老に至るの時請を用いず敢て酢(詐)欺を為す者は貲二甲。典老告げざれば貲各一甲。伍人は戸ごとに一盾。皆之を遷せ。(一四三頁)

とあり、「贖耐」が貲一甲と二甲との中間に位置する贖金の額を表している。一方、法律答問四簡には

甲、乙を遣わして盗まんと謀り、一日、乙且に往きて盗まんとす。未だ到らずして得へらるれば皆贖黥とせよ。

(一五二頁)

とあるように、「贖黥」も黥刑を贖う際の金額を指していることは明らかである。もしも耐罪や黥罪が無期刑であったならば、贖耐とか贖黥とかの額が決定し得ない筈である。耐罪(三年)や黥刑(六年)の刑期が定まっていたからこそ、これらの語を一定の金額として用いることができたのではないか。

⑪ 外妻の存在

秦律十八種一三四簡(司空律)に

隸臣に妻有れば、妻の更なるもの及び外妻有るものは衣を責めよ。(八七頁)

とあるように、隸臣には外妻のいる場合があり、外妻は刑徒である夫のために衣料を負担しなければならなかった。これは将来、刑が免ぜられて家庭に戻る可能性を前提とした規定である。隸臣がもし無期乃至終身刑であるならば、刑に服したその時点より、夫婦が再び生活を共にする望みは絶たれることになり、従って「義」も絶える筈である。にもかかわらず、もとの夫婦の間に対国家への負債を有たせるということは、妻にとって苛酷であり、かつ不合理で

ある。秦律全般に流れる合理的精神と徴して、そのようなことはまず有り得ないと言えるであろう。故に、これまた隸臣が有期刑であつた徴表である。

⑫ 隸臣妾の債務勞役

勞役刑徒である筈の隸臣妾が債務勞役に就くことがあつた。このことを記す秦律十八種七七—八簡（金布律）には隸臣妾公器・畜生を亡すること有れば、其の日月を以て其の衣食を減ずるも、三分取一を過ぐることを母れ。其の亡する所衆くして、之を計るに終歳の衣食以て稍賞するに足らざれば、之を居らしめよ。其の人（死）亡すれば、其の官畜夫及び吏の主者をして之を代賞せしめよ。（六〇頁）

とある。⁹⁶もし隸臣妾が終身の身分であるとすれば、自身の不注意で國家に損失を与えたとしても、彼らに債務勞役させねばならない理由はない。そもそも債務勞役は、債務を負う能力を有する者に課せられるものである。（私奴婢の場合）は主人の代行者として債務勞役に就くこともあつたが、隸臣妾が生涯この身分を脱し得ないのであれば、彼らを一時的に債務勞役に切り替えることの意味は見出せない。彼らが債務勞役に就けられるのは、將來自由身分に復帰できることを前提としてゐるからである。その故に、彼らは刑期の途中で、一旦本刑を中断して債務勞役についたものと考えられる。そして債務を完済すれば、再び本刑に復帰して刑期の終了を待つものと理解されるのである。

以上十二点にわたつて、隸臣妾をはじめとする秦代の勞役刑が有期刑であつたとする筆者の論拠を述べた。秦律における城旦舂、隸臣妾、鬼薪白粲、司寇等の刑名は、それ自体で刑期を示すものではなく、刑期を示すのはそれらの上に冠せられる刑（六年）、完（四年）、耐（三年）という名称の方であつた。

さて、秦律がかくも複雑であつたのには理由がある。秦は身分を重んずる封建国家であると同時に、商鞅爵制に見られる如き、身分よりも国家に対しての貢献度を重視しようとする傾向もあつた。その故に、たとえ同じ犯罪行為であつても、犯罪者の置かれた社会的立場や爵の有無等によつて区別し、それぞれに異なつた刑名を用いたと考えられる。まず、城旦春と隸臣妾とは一般的犯罪者に対して、次に、鬼薪白粲は二級以上の有爵者に対して、そして司寇は吏等の指導的立場や高身分の者に対して設けられた刑名であつたと理解されるのである。なお、鬼薪白粲と比較すれば、司寇の方が刑のランクとしては軽かつた。城旦春と隸臣妾とを較べると、城旦春の方が刑のランクは重く、隸臣妾には自由身分の家族のいる場合があり、爵や金銭納入、或いは身代わり労役によつて刑を贖うことが可能であつた。これに対し、城旦春の場合は容易に贖刑が認められなかつたようである。

注

(60) 注13の拙稿②を参照。

(61) 注4に同じ。

(62) 魏の文侯に建言した李里の尽地力の教に「今一夫挟五口、治田百畝(畝)、歲收畝一石半、為粟百五十石、除十一之稅十五石、余百三十五石。食、人月一石半、五人終歲為粟九十石、余有四十五石。石三十、為錢千三百五十、除社閭管新春秋之祠、用錢三百、余千五十。衣、人率用錢三百、五人終歲用千五百、不足四百五十、云云。」とある。一五〇石の收穫を石三〇錢で換算すると四、五〇〇錢となる。(但し、これは一〇〇歩一畝制に基づく魏における標準的農家の總収入額であり、秦においては、商鞅によつて二四〇歩一畝制が採られるようになる。一步は約一・九平方メートル)

(63) 注60に同じ。

(64) 注13の拙稿③を参照。

(65) 注3に同じ。

(66) 秦律雜抄三二—三簡に「匿敖童及占糶不審、典老贖耐。●百姓不当老、至老時不用請、敢為詐(詐)偽者、贖二甲、典老弗告、贖各

一甲、伍人、戸一盾、皆遷之。(一四三頁)とあり、典老が主体の罪に対して科せられる「贖耐」は、事実を告発しなかったという從属的な罪に科せられる贖一甲と、吏が主体の罪に対して吏自身が科せられる贖二甲と中間であり、それは即ち贖一甲一盾の額に均しかつたと見られる。一方、法律答問三〇—一簡には「挾鑰贖駮。(中略)挾之且欲有盜、弗能啓即去、若未啓當贖二甲。(一六四頁)」とあり、盜む意志がなく、且つ鍵を開ける前に捕まった場合の贖二甲に比べて、開けて後に捕まった場合の「贖駮」の方が額は大きい筈であり、且つ別に「二甲一盾」(法律答問四九簡)の語があつたことから「贖駮」は贖三甲に相当したと判断される。即ち「贖駮」は「贖耐」の倍額であつた。注13の拙稿④⑤を参照されたい。

(67) 「能得甲(爵)首一者、賞爵一級、益田一頃、益宅九畝、云云。」とある。

(68) 效律に「馬牛誤職(識)字者、贖官畜夫一盾。(一一一頁)」とあり、馬牛の識字を誤ることによって國家に馬(四千錢程度)や牛(三千錢程度)の損失をもたらす可能性がある故に、これに対して科せられる罰額である一盾が五千錢というのは妥当な額であつたと言えよう。

(69) 秦律雜抄に「傷乘輿馬、決革一寸、贖一盾、二寸、二盾、過二寸、贖一甲。(一四一頁)」とあることから、一甲は二盾よりも高額であるという説もあるが、それは誤っている。『睡虎地秦墓竹簡』中に「贖二甲」の語は他に見えず、二盾が即ち一甲と解して矛盾はない。即ち、馬の皮革を傷つけること一寸未満ならば罰として一盾(まで)、二寸までなら二盾(まで)を科し、二寸を過すと甲単位のコ罰となる、と解せられる。

(70) 例えば秦漢の社會經濟史料として用いることのできる『九章算術』卷七に「今有善田一畝価三百、惡田七畝価五百、今并買一頃価錢一万。問、善惡田各幾何。」とあるように、一頃一万錢というのは現実的な數値でもあつたが、同時に『居延漢簡』の徐宗簡及び礼忠簡に見られる如き、田の評価額でもあつたと思われる。

(71) 拙稿「漢代の穀価」(『東洋哲學研究所紀要』一、一九八五)を参照。

(72) なお、石三〇錢で計算すると五大夫(九級爵)の四千石は一級につき一三、三三三錢、大庶長(二八級爵)の一万二千石は一級につ

き二万銭となる。これは爵が上がるにつれて累進的にその価格が高くなることを示しており、その根底に「爵一級一萬銭」という基本線があったと見られる。

(72) 注62に同じ。

(74) 四川省博物館・青川県文化館「青川県出土秦更修田律木牘」(『文物』一九八二・一)及び楊寬「釈青川秦牘的田畝制度」(同右一九八二・七)を参照。一九八七年出土の同木牘によれば、秦の武王二年(前三〇九)の時点で既に二百四十步一畝制が行われており、その起源が商鞅の変法にあったことはほぼ疑いない。

(75) 仮に純金(比重は一九・三)が得られたとしても、一立法寸(一寸は三ミリメートル)の重さは一三五グラムほどにしかならないが、概数としては一斤(二五〇グラム)に近く、その故に一万銭の目安として「黄金方一寸」が用いられたのであろう。

(76) 『史記』の始皇帝即位十六年(前二三一)の条に「初令男子書年。」とあり、秦ではこの年までは国民の年齢把握をしていなかった。『睡虎地秦墓竹簡』によれば、身長六尺五寸を越えたときに縣役台帳に傳(登録)するのみで、兵役と縣役も未分化の状態にあったようである。

(77) 注5に同じ。

(78) 「完刑」という熟語は『睡虎地秦墓竹簡』中には見られない。『晋書』刑法志に「改漢旧律不行於魏者除之、更依古義制為五刑。其死刑有三、髡刑有四、完刑作刑各三、贖刑十一、罰金六、雜抵罪七、凡三十七名。」とあるが、西晋において初めてこの語が用いられたのではなく、秦代以前より完刑という呼称はあったと思われる。

(79) 鬼薪白粲はもと二級以上の有爵者の就くべき刑であったが、有爵者であってもその罪の程度が重ければ、やはり城旦舂となつたのではなからうか。もしそうだとすれば、城旦舂満三歳の者のうち、もと二級以上の爵を有していた者が鬼薪白粲となり、大多数を占めるそれ以外の城旦舂が隸臣妾に移されたのであろう。なお、完鬼薪白粲の刑名も、刑法改革以前には存在したと思われる。

(80) 完城旦舂の略称が城旦舂であったのと同じく、完隸臣妾の略称が隸臣妾であったと思われる。

(81) 例えば、刑法改革より四年めの年には当初城旦舂で未満一歳であった者が満三歳となり、最後の完隸臣妾または鬼薪白粲となり、次の年には旧刑法下での完刑刑徒はいなくなる。

(82) その故に、「刑城旦舂」は黥等の肉刑を受けた城旦舂を意味した。文帝の改革以降は肉刑がなくなったので、「刑罪」の意味も当然のことながら変化した。

(83) 右の解釈については注13の拙稿①及び⑦を参照されたい。『漢書』刑法志の「諸当完者、完為城旦舂」に補注を加えた王先謙は「不加髡鬻、謂之完。」と記しており、彼の解釈では完城旦に髡鬻は伴わなかったことになり、孟康注を「不_レ加_二肉刑・髡鬻_一也。」と読んだことになる。しかしながら、肉刑が名詞であるのに対して髡鬻は動詞である。髡鬻を名詞として用いる用法は管見の限り漢代にはない。従って、「肉刑を加えず」の表現はあっても「髡鬻を加えず」と読むのは無理である。

(84) この解釈については注3の富谷氏①論文の注を参照。なお、注13①拙稿では「其髡鬻故曰髡」を「其の髡鬻はもと髡と曰ふ」と読んだがここは「其の髡鬻（を去る）故に髡と曰ふ」と読むべきであろう。ここに訂正する。

(85) 『史記会注考証』には耐とは半ば髡すること、即ち頭髮を去って髭を残すこととする中井積徳の説（半髡曰耐、去其頂髪、而存其髣之毛、故曰、罪不至髡也。」）を紹介している。中井らは応劭注を「髡罪にて髡に至らず、其の髡鬻を完うす」と読むのであるが、これでは「其の髡鬻（を去る）故に髡と曰ふ」とある前文と矛盾するであろう。

(86) 法律答問一〇九及び一一一簡を参照。

(87) 漢初にも「髡鉗」という熟語は用いられたが、これが刑罰体系の中に取り入れられたのは文帝十三年の刑法改革の時点からであったと考えられる。注13の①拙稿を参照されたい。

(88) 贖刑の額と刑名（刑期）との関係は、耐罪（二年）が贖耐_一一甲一盾、完刑（四年）が二甲、刑罪（六年）が三甲（_一贖_二黥_一）に相当する。なお、贖耐の語があつて「贖完」がないのは二甲がこれに代わつて用いられたからである。注13の⑤拙稿を参照されたい。

(89) 禁錮については拙稿「古代中国における禁錮」（平成二年度科研報告書『中国史における正統と異端（二）』）を参照されたい。

(90) 衛宏は作如司寇を男性の司寇に対応する女徒であつたと解しているが、法律答問六三簡に「將上不仁邑里者、而縱之可論。当繫作如其所縱、以須其得。有爵、作官府。（二七八頁）」とあることから知られるように、秦律においては「作如」は女徒の義をもたず、司寇に対応する女徒は春司寇と称せられた。

(91) 鎌田重雄氏は、「歳数以免」を数年後には免するという意に解しているが、刑城旦舂の刑期に関する記述において数年後という曖昧

な表現がなされるとは考え難い。同氏「漢代の禁錮」(『歴史学研究』一〇八・九号、一九四三年)を参照。

(92) 整理小組の解釈では、葆子を任子としている。妥当と思われる。

(93) 同じく法律答問一一一簡に「葆子獄未断、而誣当刑鬼薪。勿刑、行其耐、有繫城旦六歲。(一一九頁)」とある。整理小組は誣の後に「告人、其罪」の四字を補足挿入して解釈するが、刑鬼薪とは特殊な刑名であり、これに相当する罪で誣告することは不可能である。というのは前条に続けて「可謂耐為鬼薪未断、以当刑隸臣及完城旦誣告人、是謂当刑鬼薪。(同右)」とあるように、耐鬼薪に相当する罪を犯し、なおかつ他人を誣告した罪がこれに併合されるという特殊な事情によつて、初めて刑鬼薪という特殊な刑名になり得るからである。従つて、一一一簡の前文は「葆子であつて、誣告罪との併合によつて刑鬼薪となるべきものについては、肉刑を施さないで耐(髡の剝去)のみとし、拘束して六年間の城旦の労役に就けよ。」という内容であつたと思われる。この条から、刑鬼薪白粲も六年刑であつたことが窺われる。

(94) 敝密に言えば刑法改革の時点で刑城旦舂未滿一歳の者の刑期終了は第五年目となるが、彼らは滿一歳の時点より完城旦舂抜いとなつてゐる。

(95) 秦律における刑罪には、刑城旦の他に刑隸臣や刑鬼薪もあつた。文帝の刑法改革の際にこれらについて触れないのは、漢律がこの刑名を受け継がなかつたか、或いはそれまでにその刑名が廃止されていたのであろう。

(96) 本文の解釈については注13の拙稿⑦を参照されたい。